

連載 **エッセイ** No. 18 **浮萍 一道 開く**

● NPO法人ホップ  
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

コロナウイルス感染症が流行するようになってから地下鉄を利用する機会が少なくなっているが、陽気に誘われて、久しぶりに、利用してみようと思い、ICカードSAPICAを、本人分と不特定介助者分の2枚を購入した。

最近、加齢のせいかな？病気による進行か？よくわからないが、電動車いすのちょっとした操作でも疲労が強くなり、以前のように長時間のジョイスティック操作が難しくなってきた。そのために近ごろは天候に関係なく、ほぼ福祉車両で外出する機会が多くなってきた。

札幌で暮らし始めた頃は、車いすで利用できるタクシーが少なかったこともあり、自宅からエレベーターが設置されている地下鉄駅まで、小一時間かけて散歩気分移動していた時期もあった。その頃の、地下鉄駅はエスカレーターがあれば良い方で、事前に連絡し駅員5～6人で車いすを担いでもらい階段を上り下りしていた。

今となっては、いつの間にか市内全駅にエレベーターが設置され、電動車いすでもストレスフリーで利用できるようになり、改札もICカードで車いすでも利用できるようになった。エレベーターの扉がチェーンでつながれ、利用の度に、窓口で利用申請していたことも、遙か昔の懐かしい記憶になりつつある。

札幌駅近くの職場で働いていた時は、タクシー代が少ないと車いすでは乗せてもらえないこともあった。介助者と一緒にタクシー乗り場に並んで順番が来てもドアを開けてもらえず、仕方なく配車センターに連絡しても配車がされないことが多かったため、乗車料金が多少でも高くなれば利用しやすくなるのではないかと期待して、少し離れた南郷15丁目近くに住んでいたことがある。

自宅近くの地下鉄の駅には、エレベーターが設置されていなかったもので、天気の良い日にはエレベーターがある白石駅まで、サイクリングロードを電動車いすで、ちんたらと通勤散歩を楽しんでいた。

病院や施設にいた時には気づくこともなかったが、風を心地よく感じたり、冷たい風に季節の変わり目を感じたり、不便を感じながらもエレベーターがないことが幸いし、通勤をそれなりに楽しく過ごしていた。

幼いころから、立ち上がって歩くことができなかつたため、よく空を見上げて、流れる雲の形が変わる様が不思議に感じていた。その後の入院生活でも、窓から見える飽きることのない景色を楽しんでいた。入院中はこれといった娯楽もなかったもので、唯一変化を感じる事ができた。

就職して、札幌で過ごすようになり地下鉄に初めて乗ったときのわくわく感と同じような興奮は、今でも感じる事ができる。旅行の時に行き先々で、バスや電車に乗りたくなる乗り物好きは、幼い頃からの影響があるのかもしれない。

風も冷たくなり、寒さで腕が動きにくくなるまでにタクシー、バスを使って出かけておきたいと思う。JRの交通各社は、人口減少、在宅ワークなど通勤、通学を含めた利用客数の減少が将来的に更に進んでいくことを見据えて、路線廃止、駅の無人化を進めて行きたいと考えているようだ。

無人化された駅は、バリアフリー化されることもなく、最寄り有人駅の利用を薦められていくと思う。バス、タクシーを車いすで利用できれば多少の不便は受け入れなければならないかもしれないが、利用できる環境にはない。

自由に移動できるようになることを願っているが、現実には逆行している。JRは民営化時に負債免除や資金援助を受けている。バス、タクシー事業者も公的に準じた事業者として、すべての人に移動の自由を保障する義務があると思う。交通事業者のみなさんが最大限の努力義務を行い、誰もが自由に移動できるようになることを願っている。